

## 小兒尿道結石ノ一例

|       |                                                                                             |
|-------|---------------------------------------------------------------------------------------------|
| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2017-10-04<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者:<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="http://hdl.handle.net/2297/38363">http://hdl.handle.net/2297/38363</a>             |

(原著及實驗)

實驗例ノ摘要

一、本病ノ家族的ニ襲ヒ而モ毎年十月頃ニ發生セシ該家ノミニニ發生シ他ニ發生セザリシ

二、發作時ハ惡寒ヲ以テ初リ尙多少ノ全身振顫ヲ増ス

三、局所症狀ノミニニ發生セシ

四、靜血乳頭ヲ認メシ

五、水浴法ニヨリ毎常恢復ヲ見シ

●患者ノ妻(廿六才)ノ一昨年四肢ニ輕度ノ該發作ヲ來セシガ昨年分婉ノ爲實家ニリシ爲ガ發作セズ今年ハ引續キ該家ニアリ十月夫ト前後シ下肢ニ異狀ノ癢痒ヲ感シ遂ニ本病ヲ煩ヒ實家ニ歸リタリ余ハ十一月廿七日訪チシニ既ニ水ヨリ離レ治癒ニ向ヒツ、アリタリ療法トシテハ患部ノ水治法ト所謂神水ノ服用ヲ行ヒタリト稱シ其卓効ヲ稱賛セリ舉子ハ今年十月肺炎ノ爲死亡セリト尙妹(十三才)ハ子守トシテ昨年ヨリ該家アリシガ同發作ヲ見ザリシト或ハ此間何等ガ原因ヲ有スルニ非ザルカ

終ニ臨シ諸先生ノ咸書ノ教示貸與ト甚大ノ指導ヲ蒙リシヲ感謝ス(四十二年十二月十六日草稿) Liberator 齊略ス

(因ニ本郡ニ於ケル本病ノ小統計等ノ記載ハ醫事新聞ニ報告セリ)

●小兒尿道結石ノ一例

齋藤義雄(吳)

(明治四十二年十二月藝備醫學會吳部會例會)  
(ニ於ケル演說)

尿道結石ノ砂礫狀ノ小ナルモノニアリテハ自他共ニ知ラズ、ノ間ニ放尿ト同時ニ排出スル場合アリテ屢々之アランモ稍大ナルモノニアリテハ比較的稀有ノモノナリ、殊ニ僅々二歳位ノ小兒ニ於テ尿道結石ヲ見ルハ頗ル稀

有ト信ズ、余最近滿二歳ノ小兒尿道結石ヲ實驗シ聊カ興味ヲ感シタルガ故ニ左ニソノ梗概ヲ記述シテ茲ニ報告セント欲ス

患者ハ吳市胡町 海軍職工ノ家族

申山某 滿二歳ノ男兒(明治四十年十月生)

明治四十二年九月二日初診

血族并既往歴 患者ノ父母共ニ健在、兄弟二名亦共ニ健在、患者ハ生來強壯ナラズ生後二三月月ナ經テ腸加答兒及ビ肺炎ヲ病ミ醫治ヲ受ケシト又四十一一年四月ヨリ八月迄腹膜炎ヲ病ミ亦々醫治ヲ受ケシト現病ノ既往症 三十日ホド前ヨリ稍尿利困難ノ氣味、尿線細小ナル事ヲ發見シ醫治ヲ乞ヒタルモ經過長シカラズシテ漸次其度ヲ増シ益々尿利困難ヲ來セリ併シ腹痛尿道痛等ヲ自覺セザリシ由又血尿等ヲ見シヲナシト然ルニ九月二日朝ヨリ殆ント突然ニ下腹痛ヲ來シ尿利非常ニ困難ヲ感シ排尿点滴狀トナリ正午ヨリ殆ント尿閉ヲ來セリ

現症 体格中等、營養稍不良、一見過敏性トナリ恐怖ノ狀ヲ呈ス下腹部著シク膨滿シ膀胱充滿ヲ認メタリ(午後三時頃)放尿ヲ促シ特ニ怒責セシメシモ全ク尿利ナシ、陰莖下面殊ニ陰囊ノ後上部殆ンド會陰ニ近キ部分ヲ觸診スルニ限局性ノ硬結物ヲ稍深部ニ觸ル示指頭大ニシテ疼痛アリ併シ當該部分ノ皮膚ニ發赤腫脹等ナシ、試ニ硬膜製ノ尿道カテーテルヲ挿入セシニ尿道口ヨリ三、五仙迷ノ部ニテ停止シテ不通、而シテカテーテルノ先端ニ於テ抵抗アリテ一種ノ音ヲ聞ク正シク異物(結石)ト診定ス但右ノ異物ハ不動性ナリキ

前陳ノ次第ナルヲ以テ直ニ全身麻酔ノ下ニ異物ノ部ニ於テ外尿道切開術ヲ施セシニ恰モ海綿體部ト膜樣部トノ境界部ニ於テ結石ノ挿入スルヲ認メタリ直ニ之ヲ抽出セリ結石除去後カテーテルヲ挿入セシニ容易ニ通過シ多量ニ排尿セリ依テ尿道粘膜及ビ切開口ヲ式ノ如ク縫合シ處置セシ二十一日ニテ第一期癒合ヲ得全治退院セリ

手術後患者ノ尿ヲ検査セシニ弱酸性ニシテ僅ニ尿混濁アリシモ三四日ニシテ清澄トナレリ敢テ膀胱加答兒等ノ症狀ヲ認メザリキ抽出セシ尿道結石ヲ記載スレバ下ノ如シ

重量 ○、四瓦(抽出後二日ノモノ)  
形態 長徑 一、二仙迷  
上頭七、○密迷  
中體六、○密迷  
下尾四、○密迷  
厚徑 上頭四、○密迷  
中體六、○密迷  
下尾三、○密迷

表面 粒々凹凸不平上大頭部ニ於テ特ニ著明但シ兩側面ハ粗造平坦ナリ

色澤 帶褐黃色但シ兩側平坦面ハ帶黃白色

硬度 硬固ニシテ質緻密

橫斷面 層煙

比重 大

如上ノ結石ハ頭部即チ太キ部分ナリ上方ニ尾部即チ細キ部分ナリ下方ニ向ケテ尿道内ニ固ク符入セリ抑モ斯ノ如キ尿道結石ハ最初ヨリ尿道内ニテ形成セシモノナルカ果タ又最初膀胱内ニテ形成セシ結石カ或ル機會ニ尿道ニ向テ流下シ尿道内ニ停留シ後尿道内ニテ益々増大シ今日ニ至リシモノナルカハ疑問ナリ、余想フニ後者即チ最初膀胱内ニ形成セシ結石カ或ル時期ニ尿道ニ流下シ漸次増大現狀ノ如キ比較的大ナル尿道結石トナリシモノナランカ終リニ臨ミ畏友内藤誠意君力本患者手術ニ際シ助力ナリ與ヘラレタル厚意ヲ謝ス(終)



## 雜 纂

### ●六〇六號 使用法并に注意

#### ▲序 說

六〇六號(ヂオキシ、ヂアミド、アルゼノベンツオール)は化學的療法(ヘモテラピー)が產出せる最も優秀なる藥品也。茲に其使用法を述ぶるに當リ先づ化學的療法ある者の概説并に本劑の化學的藥物的地位に就て略説するの要ありと信ず。

抑々化學的療法は從來の藥物的療法と共に化學品を以て疾患を治癒する者なれば、汎き意味に於て其間何等選ぶ所無し。然りと雖も其研究上の立場に於ては二者全く其趣きを異にす。即ち從來の藥物的療法は健康體に對し、或藥品が如何に作用するやを研究する者にして換言すれば、或藥品は如何様に生理的組織又は臟器に作用するやを研究し、延いて之を療病上に應用するにあれども、化學的療法は是に反し病體即ち動物をして疾病に罹らしめ或藥品が此疾病其者に對し如何に作用するやを研究する者にして、即ち前者の歸結が對症的なるに對し本療法は實に原因的なるを異にするもの也。此種療法の研究は之を實驗治療學と稱し血清療法、狂犬病療法「ツベルクリン」療法等の免疫療法及び臟器療法は是に屬す。

蓋し藥品の作用は藥品が細胞又は病原體等と結合する事を意味する者に於ける抗毒素と毒素の關係の如き即ち是れなり。而して血清療法に於ける抗毒素は單に毒素とのみ結合し之を中和して無害とふし、敢て他に細胞組